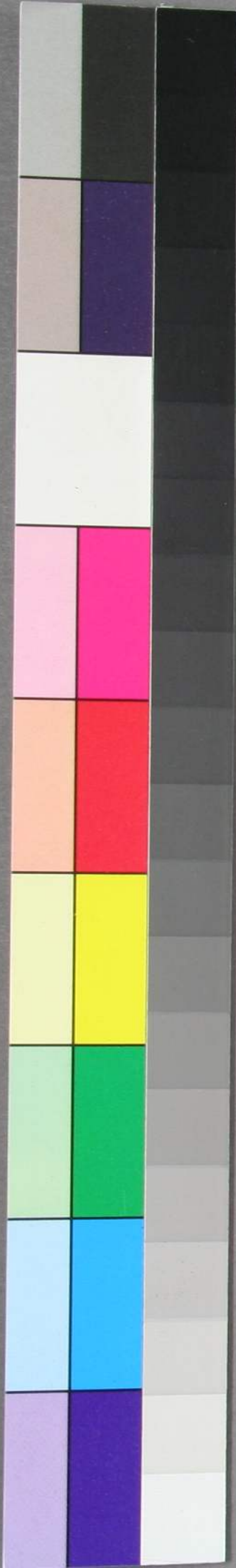


蘇岐  
續膝栗毛初編

下

3124  
2



3124  
2

金昆羅 續 膝栗毛 初編 下之卷

十返舎一九 著



讃岐圓座の名ハ諸國よもろがうて。爰由賈取入注  
の一都會るれば、繁昌殊よみづくものば町家の  
濱辺よとひて建つべし。旅籠屋なども多く、いふも  
家居まじりびやるなり。係次舟を御北八を和代の  
街よはきて大物屋といふよ入り多小女ども土  
ハよお出たらん。サアあらかあかたり打







自主菴  
天久

富の  
ひの  
人

きつ  
孫の

ふ  
ふ  
ハ



斬  
かく  
人  
ハ  
え





とき。好物ものの酒さけを一生いっせいとめとめんと。金毘かねび羅らへ  
秋あきがけあさよやア秋あきくろ。ホシニ。さうよやナアゆふづゆ  
ナア。室むろで酒さけをのんでやとた。あさよあてしう。おろし  
と。いとおよぶあさくさよやあひく子こやはなるほど。せん  
てがあらう。あらうとねくとせし。コリヤどよとせしうらふ。  
ちうちのちも酒さけとらうて。志こころせるくふわぶらうら。金毘かねび  
羅らへも。あしが酒さけ飲のらうと。りちくおがえてもござる  
ゆくよやア秋あきくろ。さよやて。せんぴうさぬのなをらナア。

おとろしい。ツイけうらのねとよわさ人ひとがナ。そのひな  
とで。糸いとがろ遠とほくして死しんでやアいな。どよのどよ。  
コリヤどよとせあさびさるがや。コリヤナ秋あきトヤ  
アひる。あぐれとでナナ。せんぴうさぬへ酒さけのうらうて  
破やぶれ時ときのナ。さすのウあてあさびさるが頓とん絶ぜつトヤ  
アさす。あさびさる。さす。あさびさる。あさびさる。あさびさる。  
大おほ変へんなるアさうぶ。ナニそのさすのよの幸さい抱だくするが  
い。あさくさる業わざがあらうて。あめんの身みのさよよめ。







威和亭  
鬼武

苗代  
生人  
下  
乃  
ゆ  
ゆ



喜多川  
月磨

服  
ゆ  
ゆ  
ゆ  
ゆ  
ゆ  
ゆ











びしろとせよふとおもや。まづいよふたのこゝのいその  
 命いのちをよとてしるるのり。とんご正さのみお人ひとの川がわや。大田  
 酒さけあてわらうのる。酒のうり外あひだよおまの  
 正ただなるぬ。とそくえんしうがよの正ただの 外あひだよとてな  
 れのとりのばうの一物ひとものぶ。さういづもなせめくハ  
 時ときよ北きたハりうかトヤアねへううをんるう出でりけよふ。ア  
 おせき。モモ 大おほまよにちをうよいり中なか。おさげへ集あひり  
 かまトいふをうらレ。五いちかけがえひの町まちよのる。丸まるあり  
もまを三里なり。まらののうらねどよまやむといふをいあり。

上うへよかきありていと  
 めううきなるあり

上うへをおほふ屋や敷きのまやよおまはる  
 津つ代よのな刀やいばのなりな及およ橋はし

是こゝより控かま現げんの宮みや山やまよゆる禁かぎ下したより二ふた三さん町まちむらりの  
 市いちの商あきなひ家やとらつて地ち美み煎せん茶ちや館かんを賣う家や

小こ次じ帝ていの商あきなひ人ひとの白しろ髪かみをうと  
 ううね人のひとのあしのあし白しろ髪かみ大おほ根ねと  
 ちとさう合あり地ち美み煎せん見み世よ



全昆羅山

林帯之

風景

三味線の

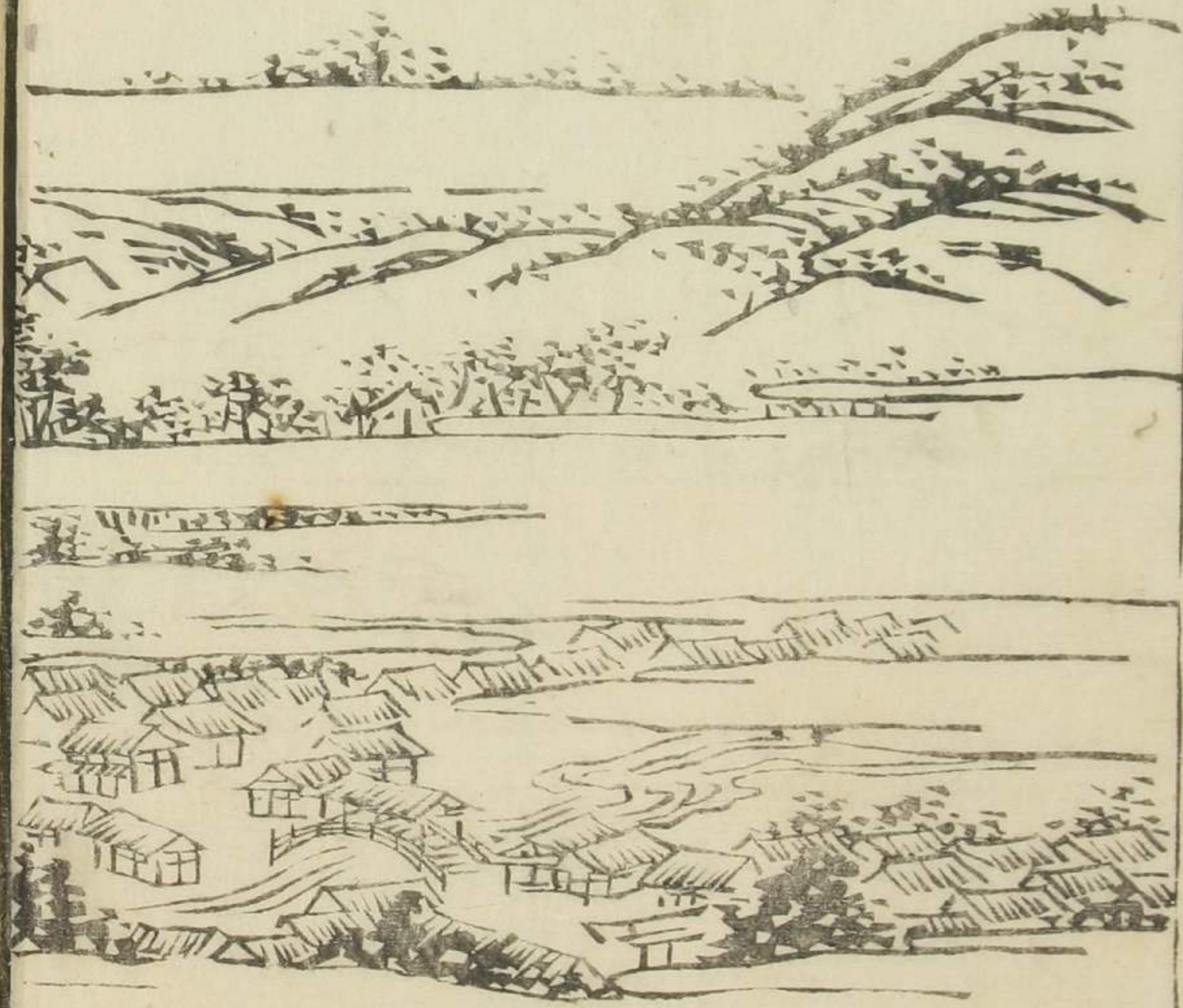
花

里

山

山

平



江がら

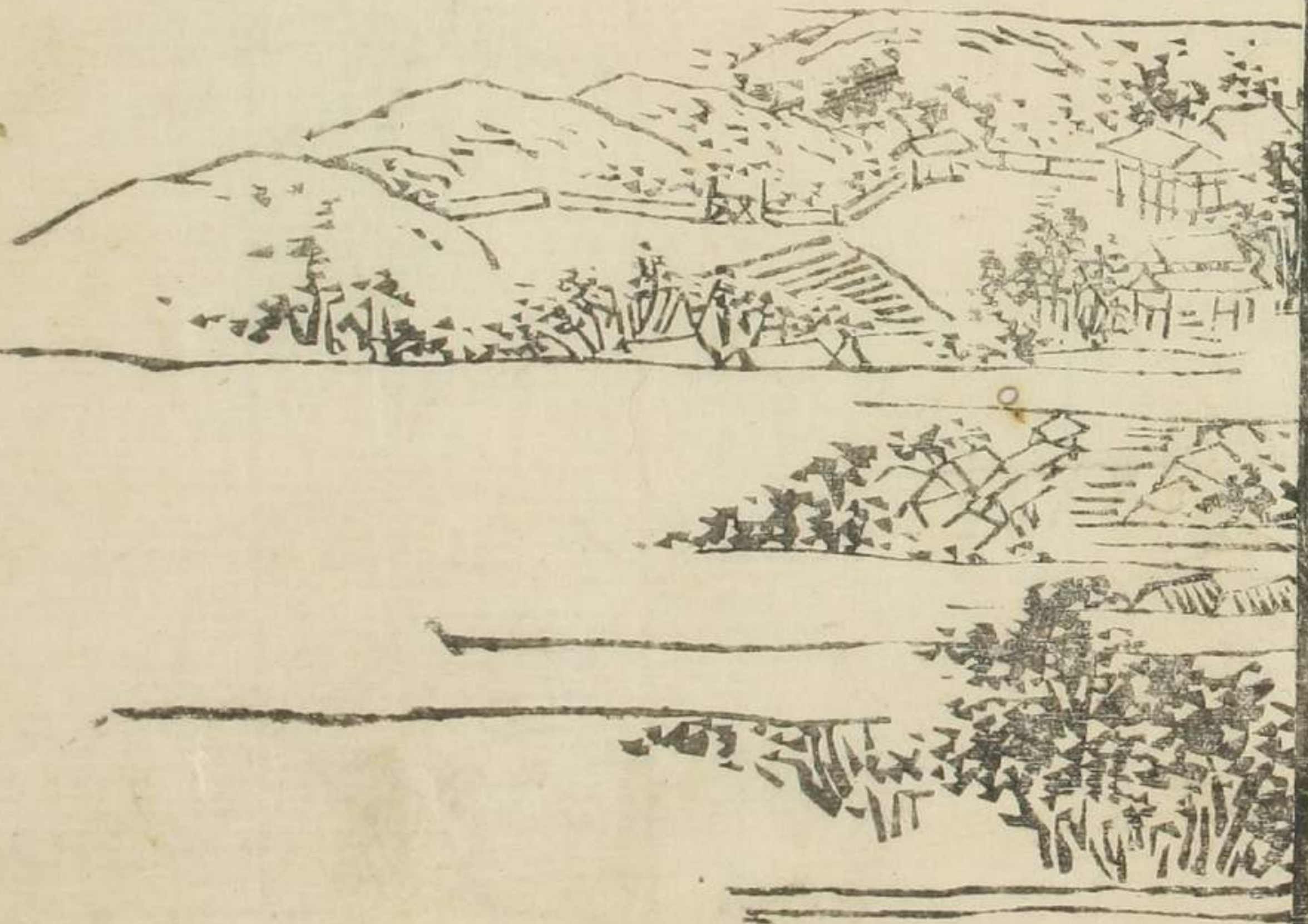
り

り

新

春秋亭

仲佐



於て仁王門より八十五六町の坂をのりて印本  
社よりその庄殿と云く。珠夜丸捨皮草  
みくわりのめく。花麗珠よりんさなり。先廣前より  
額突をりて。

十番の盤より連せし人も神徳の

おもてふ志しぬ象臥山ヶ野

六山より海上の島へ浦く郷く一帯の中より  
見とてえれて。風系いふも文あり。せくて下向の道を

つそよ。持待所神馬堂のあつりより。あつりなり。えよ  
ありて。礎道をとりより。年の以亦二三家と  
ええ大いふさの若気留より。色白き女布子  
のうよ。中敷の浴衣引たり。かく帯より裾引き  
あけ。アツトクけふて杖より。あつりあり。六十  
むろの親仁少の荷物と脊負ひより。か。うら  
は。こ。り。み。ぞ。孫次郎の女より。うづめて。目。も。お。ま  
が。ア。い。近。辺。の。方。も。え。え。ぬ。か。女。中。の。ま。お。山。へ





のめ。さらよるんたまごの王子おとこがあらざい。半かた分ぶんあるさう

畑はたけよあるふやあろ。ワハミトトはらうちなちハミ通と寺てらよいる幸さいわいさ

ちよよえんちよのしそ門かどどののハチ。如ごと来き回わいらくくんんのれ西にしを

めのがあろうねな。トともむさうそあろんんのいお

あめく飯いひふ志しあせせ。ゴごどくくのてのしもえんえん。何なにぞうめへ

さうか。まの子こよめ。紙かみ野のを呉くれるせせ。ああのふふの酒さけあ

ああららふ。酒さけををああららぬぬららめめののふふ。トとハハニニおおめめくくをを

ささららめめののなな。けけ子こややととううざざんんのの香かああららぶぶららうう。トとハハニニおおめめくくをを

トとハハニニおおめめくくをを。酒さけももああららぶぶららううののいいが

トとハハニニおおめめくくをを。酒さけののああららぶぶららううははけけくく。コレこれはは酒さけをを

ああららぶぶ。トとハハニニおおめめくくをを。酒さけののああららぶぶららううははけけくく。コレこれはは酒さけをを

ああららぶぶ。トとハハニニおおめめくくをを。酒さけののああららぶぶららううははけけくく。コレこれはは酒さけをを

ああららぶぶ。トとハハニニおおめめくくをを。酒さけののああららぶぶららううははけけくく。コレこれはは酒さけをを

ああららぶぶ。トとハハニニおおめめくくをを。酒さけののああららぶぶららううははけけくく。コレこれはは酒さけをを

ああららぶぶ。トとハハニニおおめめくくをを。酒さけののああららぶぶららううははけけくく。コレこれはは酒さけをを

ああららぶぶ。トとハハニニおおめめくくをを。酒さけののああららぶぶららううははけけくく。コレこれはは酒さけをを

ああららぶぶ。トとハハニニおおめめくくをを。酒さけののああららぶぶららううははけけくく。コレこれはは酒さけをを



のめうお辨義ハクギのせんぞト  
引くけくつてのめがらのせんを  
らせんをひらうとられもつてのじ  
とハハコトコトくおひらるへもまわーるせん ハハコト ハハコト

おでうーがのいのいのコレく酒ビのおうらうらと  
づめんどろとや。きれりと二殊ツみと。うちどれり  
めんしりてせんせハハコトイヤあまのまる酒サとありて  
大夏タなととふハハコトカヤりみキ版ハふせうハハコトのな。コノ  
おひら。あぶのめがよめでけさのいなる。モエナ おひらうて  
おんきんら。ぞくおをら由りておくれいなハハコトイヤおめ

親ハハコトよ似ハハコト合ハハコトぬハハコト大ハハコト食ハハコトいハハコトまハハコトコハハコトリハハコトヤハハコトおハハコトそハハコトれハハコトカハハコトクハハコトト  
そでめらうち女のいさひくまのむさうと 「サアあひぞく。かみおせん  
うハハコトのハハコトなハハコト「ハハコトりハハコトさハハコトぬハハコト出ハハコトくハハコトけハハコトヤハハコト「ハハコトあハハコトのハハコトぞハハコトく。ハハコトかハハコトみハハコトおハハコト出ハハコトん  
いハハコトくハハコト「ハハコトあハハコトのハハコトぞハハコトく。ハハコトかハハコトみハハコトおハハコト出ハハコトん  
あハハコトぶハハコトらハハコトハハハコトハハハコト「ハハコトあハハコトのハハコトぞハハコトく。ハハコトかハハコトみハハコトおハハコト出ハハコトん  
よめとちのちのちひとありてまりや。曼陀羅寺へまのり。あまは谷寺のふり  
みいこのころはうらこのところまで三里あり。あまのりめーと名物しとる茶を  
あり。既にまやみゆせの時より 曼陀羅寺へまのり。あまは谷寺のふり  
みいこのころはうらこのところまで三里あり。あまのりめーと名物しとる茶を  
あり。既にまやみゆせの時より 曼陀羅寺へまのり。あまは谷寺のふり  
みいこのころはうらこのところまで三里あり。あまのりめーと名物しとる茶を  
あり。既にまやみゆせの時より  
曼陀羅寺ハハコトより。殊ハハコトはハハコト險ハハコト難ハハコトのハハコト山ハハコト坂ハハコトをハハコト登ハハコトてハハコト建ハハコトるハハコトるハハコトれハハコトが









あざりめーやと 糸谷の茶屋

かくて日もちよる小。夜食も出でそとへは食ひ  
志すひくねてはひとへは。大坂りの女ををいぐけて。  
通くも奢りらとかせん。あんでも奉午をとげん  
との下をいふて。ぬくをゆりともつをだ。ひりよとめく  
け知よとせり。なるかろ。小ハおまをささる。横ぐと  
して。泳次弁よ鼻あせんと。えんゆりくよ。鬼擔を  
のよるか。ゆりて彼是と。四方山のたろり。もよとて。あ

一段とろり。座敷もせまけき。バウの女と。奴仁ち  
次の間よ床をさせ。打ちとろり。はひ弁ハ小ハと  
あよびてふとん。けり。や。床入して。人ぐの茶をま  
るさまらわるよ。折や。雨ハを平さあ。あつて。もろ  
淋しく。猪手の方のたま。し。夢も。次方よ立湯がして  
夜の更るよあさひ。ういびまの音の。啼。はひ  
時か。い。と。小ハが寐り。き。せ。ん。と。あ。ま。い。て  
次の間の。か。く。と。さ。そ。ろ。く。と。あ。ま。い。る。よ。有。明。の

とめい火のけき。さうもつりて女の尻は母が  
さつり。是らをとて。あんなに引まけり入るとよき  
女志をりようめくやうさよ。涙は声さひそめて。  
「ウくおめくどうぞ」女「さよぶめい。さよん  
何志いよやぞいな。何とよるめい。あつくの吐が  
あつて来とめい。おめく由承知であつたやアねん。  
「アナナ」女「あんなのがアんなの。あんなと  
あんなの。アノナ 持病の志毒があらうさよいな。ア  
ヤ

この志毒れむりり。女は疵毒があつてはけりねめい。  
「ナニイナ。アア女よやあんなの。女でやうく  
えんらうけん男がよきよあるめい。但し女も男も。  
ドレくえんけしてやううト。あつたよきついで。あんなの  
どつつの志毒のひでもあんなよ。アアアア。コリヤ男ぞく。さあ  
おめくが男とら。あんなのさうさうさうねん。さあ  
うどちがくでんねん。合意がわねん。女「そがやあつた  
アア赤村鼻と助とりよてす。厚敷証の舞を





















古登福











是より凡そ土船にて結ぶ牛の足まじりて接列  
路のありまじりて多程大なるを編むと云ふは  
此の意なるに依りて余の如く編むて本を編む  
おろしし由原をふみしをてりし行ふおろし  
由活刺と云ふしやいさき希と云ふ  
七んを也

本所相生町壹丁目

紙屋利助板

金昆羅  
多多諾

續藤栗毛和編下巻終

